



79. アサリ *Ruditapes philippinarum* (A. Adams and Reeve)

図版32

英名 Japanese littleneck, short-neck clam

露名 Филиппинская пафия, петушок-тапес

漢字 浅利、浅蜊、蛤仔、蜊、蜊

アイヌ語名 チウリトポ、シュルツプ、ポントポ

【形態】 殻は長楕円形で厚く、膨らみが強い。前縁は丸く、後縁に比べ幅が狭い。後縁はやや切断状である。殻頂*は膨らみ、前方にある。左右の殻は殻頂部で靱帯*によって結合し、3本の主歯*で噛み合う。側歯*はない。殻の表面には光沢がなく、殻頂を中心とする同心円状の成長脈*と多数の放射肋*があり、これらが交差して布目状となる。殻の斑紋や色彩は鮮明で美しく個体変異に富み、殻の左右で異なることもある。殻の内面は白色だが、成長に伴い後方は紫色を帯びる。北海道のものは本州のものに比べると斑紋や色彩が不鮮明で、斑紋は成長に伴い消失する。殻の色は多くの個体で薄い灰褐色だが、生息環境によって茶色っぽくなったり、黒ずんだりする。

【生態】 日本では北海道から九州沿岸の砂浜域に分布し、太平洋側に多い。国外では、北はサハリンから南はインドシナ半島までのユーラシア大陸東部と近隣の島々沿岸に広く分布する。また、日本からのマガキの移殖*種苗*に

混入し、ハワイやヨーロッパ、北アメリカなどにも分布するようになった。

潮間帯*から水深10mまでの砂泥から砂れき*の海底に、殻長*の約1～2倍の深さまで潜ってすむ。水管*を砂の中から海底上に伸ばし、入水管*から海水を体内へ吸い込み、海水中の珪藻*類などの植物プランクトンやデトリタス*をえらでこしとって餌とする。不要な物質と海水は出水管*から体外へ吐き出す。

成長は場所によって異なるが、一般に春から秋にかけて成長し、水温の低下する冬はほとんど成長しない。厚岸湖では平均して1年で殻長0.9cm、2年で2.1cm、3年で3.4cm、4年で4.1cm、5年で4.4cmになる。これに対して九州の有明海では1年で2.5cm、2年で3.6cm、3年で4.0cmと成長は速い。

産卵は北海道では夏に1回、東北では年に1～2回、関東以南では春と秋に2回行われる。成長や産卵回数の違いは、主に水温の違いによる。殻長2cm未満で性成熟*する個体もあるが、多くは2cm以上で産卵する。生物学的最少形*は北で大きく、厚岸湖では雄は殻長2.2～2.7cm、雌は3.0～3.5cm以上である。1回に放出される卵の数は、室内実験から約150万～600万粒と推定されている。卵の大きさは直径60～70 μm 、精子の長さは1～2 μm である。

放出された卵と精子は海水中で受精する。受精卵から生まれたトロコフォア*幼生*は、36時間後には変態*して殻長約100 μm のベリジャー*幼生となり、餌をとり始める。ベリジャー幼生は2～4週間海水中を浮遊し、殻長約200 μm で稚貝*に変態して着底*し、底生生活を始める。



腰まきの漁具と操業風景（野付湾）